

日本の共感覚者女性の初潮に関する研究

2009年11月15日

岩崎純一

掲載サイト：<http://iwasakijunichi.net/>

目次

1. 調査結果
2. 共感覚者女性と一般女性の初潮年齢の比較
3. 共感覚者女性と一般女性の閉経年齢の比較
4. 初潮年齢と閉経年齢の関係
5. 小学生での初潮の経験率
6. 初潮年齢の変遷
7. 地方の過疎化が共感覚者女性・一般女性の初潮にもたらす影響

日本の共感覚者女性の初潮の年齢と一般日本人女性の初潮の年齢とを調査・比較した。

まずは冒頭に調査結果を示し、以下に比較検証の詳細を記した。

1. 調査結果

被験者内訳

共感覚者女性 168名

●2006年1月1日～2008年12月31日の間に、初潮（閉経）年齢の確認がとれた共感覚者女性。

●「全ての仮名に色が見える共感覚」を保持していることを最低条件とする。仮名・漢字・数字等を問わず、全ての文字に色が見える共感覚者女性36名を含む。

平均初潮年齢

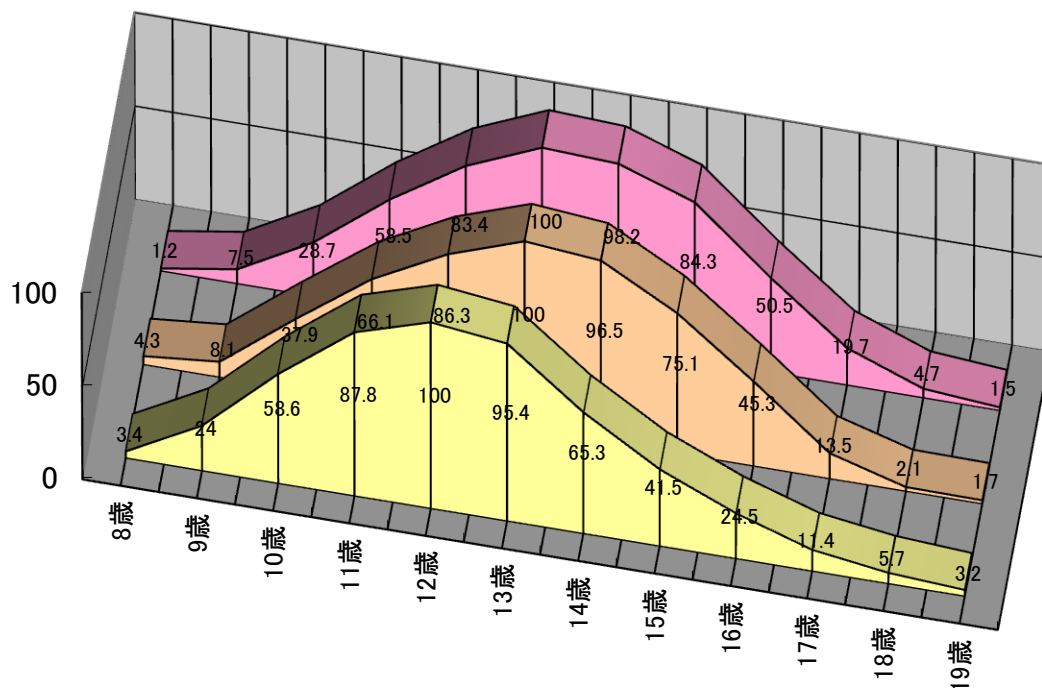
女性全体・・・12.3歳

共感覚者女性・・・13.1歳

2. 共感覚者女性と一般女性の初潮年齢の比較

以下は、共感覚者女性と女性全体の初潮年齢の差を示したものである。(女性全体の値は、各参考文献から得られる限りの統計の平均値。女性全体には共感覚者女性も含まれる。)

初潮を迎える年齢のピークの差
(各々、ピーク時を100人としたときの、各年齢における人数。)



	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳
□2008年現在、20代の女性全体	3.4	24	58.6	87.8	100	95.4	65.3	41.5	24.5	11.4	5.7	3.2
□2008年現在、50代の女性全体	4.3	8.1	37.9	66.1	86.3	100	96.5	75.1	45.3	13.5	2.1	1.7
□2008年現在、20代の共感覚者女性	1.2	7.5	28.7	58.5	83.4	100	98.2	84.3	50.5	19.7	4.7	1.5

□2008年現在、20代の女性全体	□2008年現在、50代の女性全体
□2008年現在、20代の共感覚者女性	

現在 20 代の共感覚者女性は、現在 50 代の女性の若年期の体質に近いが、それよりもさらに以前の時代の女性の体質に近いことが予想される。

最近では、小学 3・4 年生で初潮を迎える女子が増えている。これは、欧米の女性の初潮の低年齢化をも追い越すペースでの低年齢化であり、現在の一般日本人女性は、平成時代に入って以降は特に、欧米人女性よりも初潮が早い。¹

また、青森や秋田などの東北地方や、沖縄や九州地方の一部では近年、中央日本よりも初潮年齢が低いことが知られるが、これは過疎化による妊娠機会の不均衡を是正しようとする反動と考えられ、大都市部の初潮の低年齢化とは区別して考える必要がある。²

3. 共感覚者女性と一般女性の閉経年齢の比較

次は、共感覚者女性と女性全体の閉経年齢の差を示したものである。

¹ 欧米人女性の初潮年齢の推移調査を以下に示す。私の研究結果と照らし合わせると、2008 年現在で 20 代の日本人共感覚者女性の初潮年齢は欧米人女性よりも高く、日本人女性一般のそれは欧米人女性よりも低い。

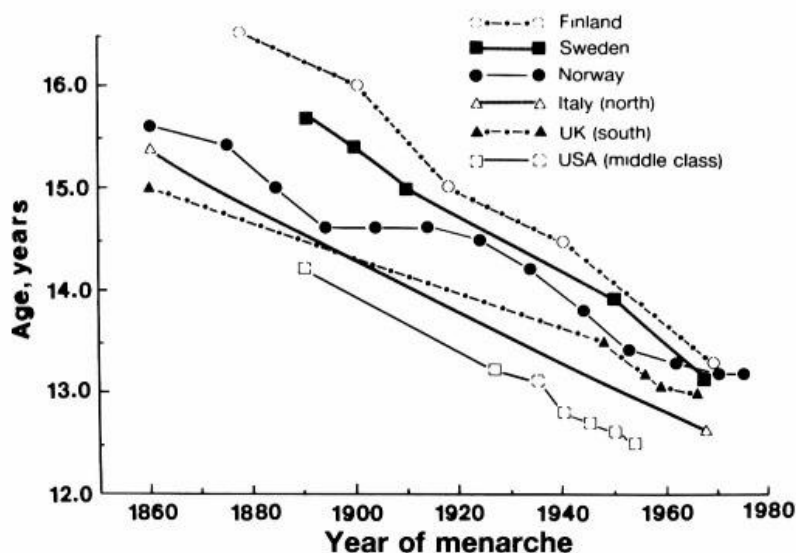
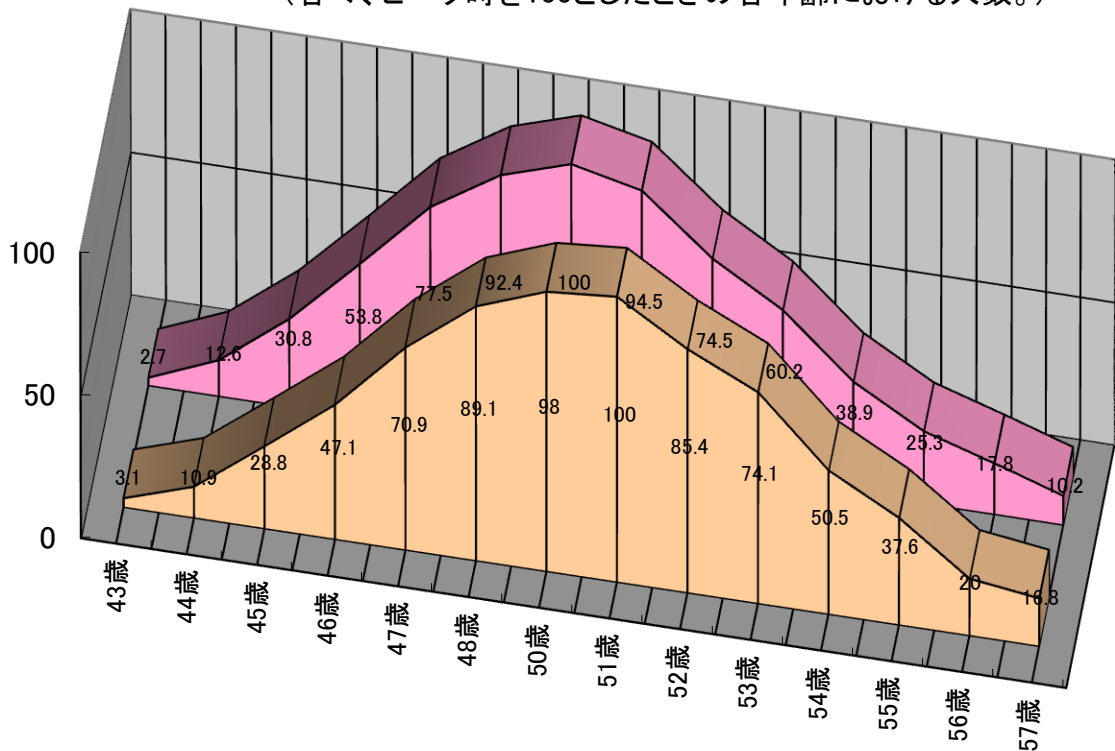


FIG. 16.7. Secular trend in age at menarche 1860-1980. Values are plotted at year in which menarche took place. (From Tanner 1978.)

² 詳しい考察は後述。大都市部の女性の初潮年齢を挟み込む形で地方女性の初潮年齢が両極化しているのがなぜなのかを的確に説明する学説は、いまだ見い出されない。(食生活の変化による卵巣機能の急上昇・体格の向上などだけでは説明できない。)

閉経を迎える年齢のピークの差
 (各々、ピーク時を100としたときの各年齢における人数。)



	43歳	44歳	45歳	46歳	47歳	48歳	50歳	51歳	52歳	53歳	54歳	55歳	56歳	57歳
2008年現在、閉経を迎えた50代女性全体	3.1	10.9	28.8	47.1	70.9	89.1	98	100	85.4	74.1	50.5	37.6	20	16.8
2008年現在、閉経を迎えた50代共感覚者女性	2.7	12.6	30.8	53.8	77.5	92.4	100	94.5	74.5	60.2	38.9	25.3	17.8	10.2

2008年現在、閉経を迎えた50代女性全体 2008年現在、閉経を迎えた50代共感覚者女性

共感覚者女性は、そうでない女性に比べて閉経が少し早い傾向にあることが分かる。一般に、初潮が遅かった女性は、閉経が若干早くなる傾向にあるが、共感覚者女性においてもこれが当てはまることが分かった。

ただし、初潮の低年齢化、閉経の高齢化は、食生活が変化したこと、寿命が延びたこと、卵の発育が著しく良くなったことなどによるもので、かつては未熟な卵を多数残したまま閉経を迎える女性が多かったことをも考え合わせるならば、女性ホルモンのはたらきがより強い女性に月経・妊娠期間の長期化が見られるわけではないものと考えられる。

さらに、初潮が低年齢化しても、初期の月経は常に排卵を伴っているとは限らず、妊娠可能年齢は必ずしも初潮の低年齢化に従って延びるわけではない。

4. 初潮年齢と閉経年齢の関係

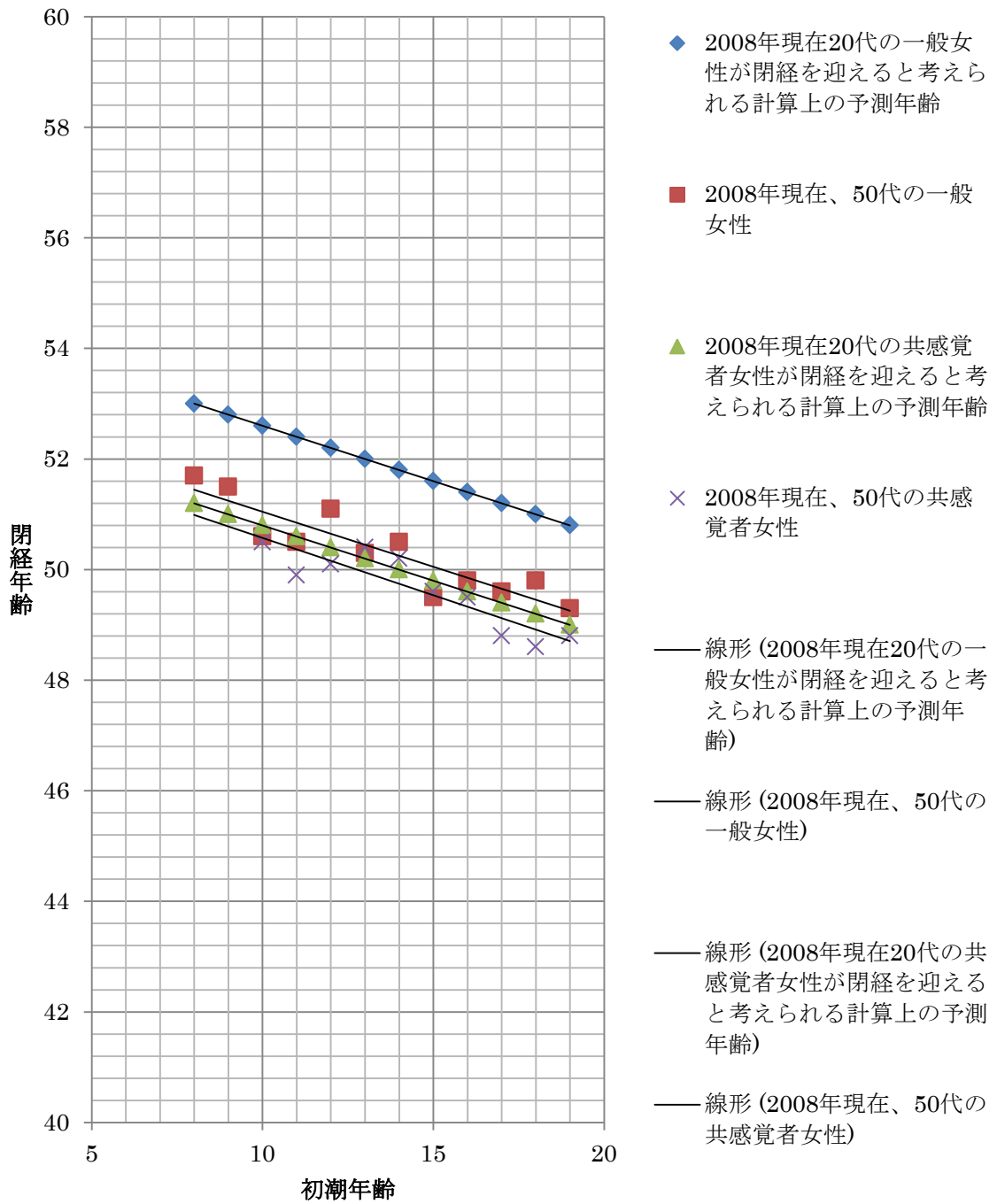
先のグラフに基づき、2008年現在20代である共感覚者女性と一般女性について、数十年後（2040年前後）に訪れる閉経期がどれだけ遅れるかを、これらの女性の初潮の時期がそれぞれ、現在50代の女性が20代であったときの初潮の時期からどれだけ早くなっているかに基づいて予測し、これをグラフ上に記して、それらの点の近似直線を描くと、すでに閉経を迎えた50代女性の直線にほぼ平行となる。

現在50代の共感覚者女性、現在50代の一般女性、現在20代の共感覚者女性の三者では、閉経期はほぼ同様の直線上に乗るのに対し、現在20代の一般女性では、閉経を著しく高齢で迎える可能性があることが分かる。

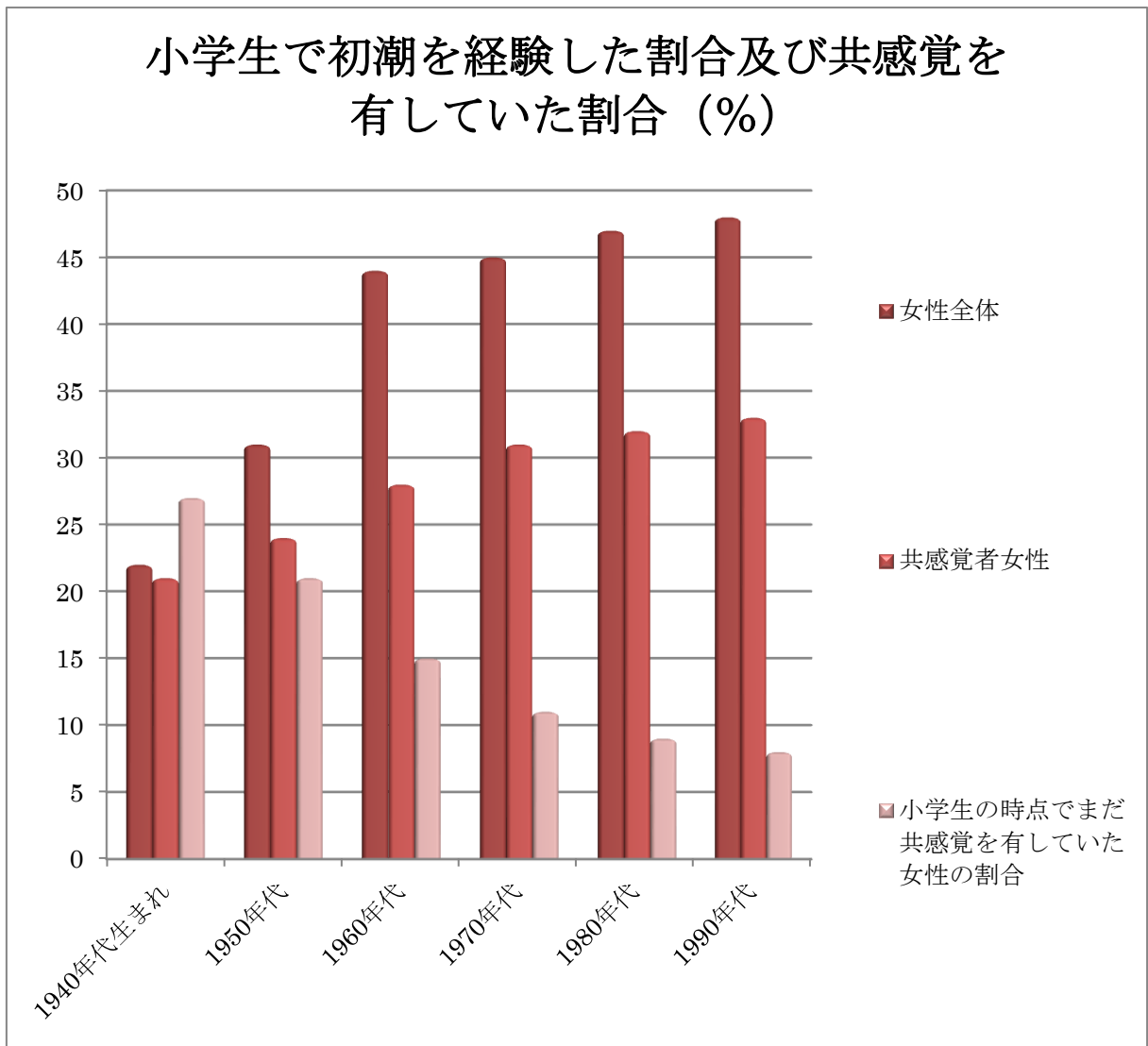
さらに、平均的な初潮年齢が5歳ほど低年齢化しても、平均的な閉経年齢は1歳しか高齢化しない。このことも、閉経そのものが女性ホルモンと無関係ではあり得ない一方で（閉経後の骨密度の低下など）、初潮の低年齢化については、生まれ持った女性ホルモン機構の影響によるものではなく、食文化の欧米化など生活環境の急変によるものである可能性を示している。

このグラフによっても、現在20代の共感覚者女性は、ほとんど戦前の一般日本人女性に近似の体質を維持していることが分かる。

初潮年齢と閉経年齢

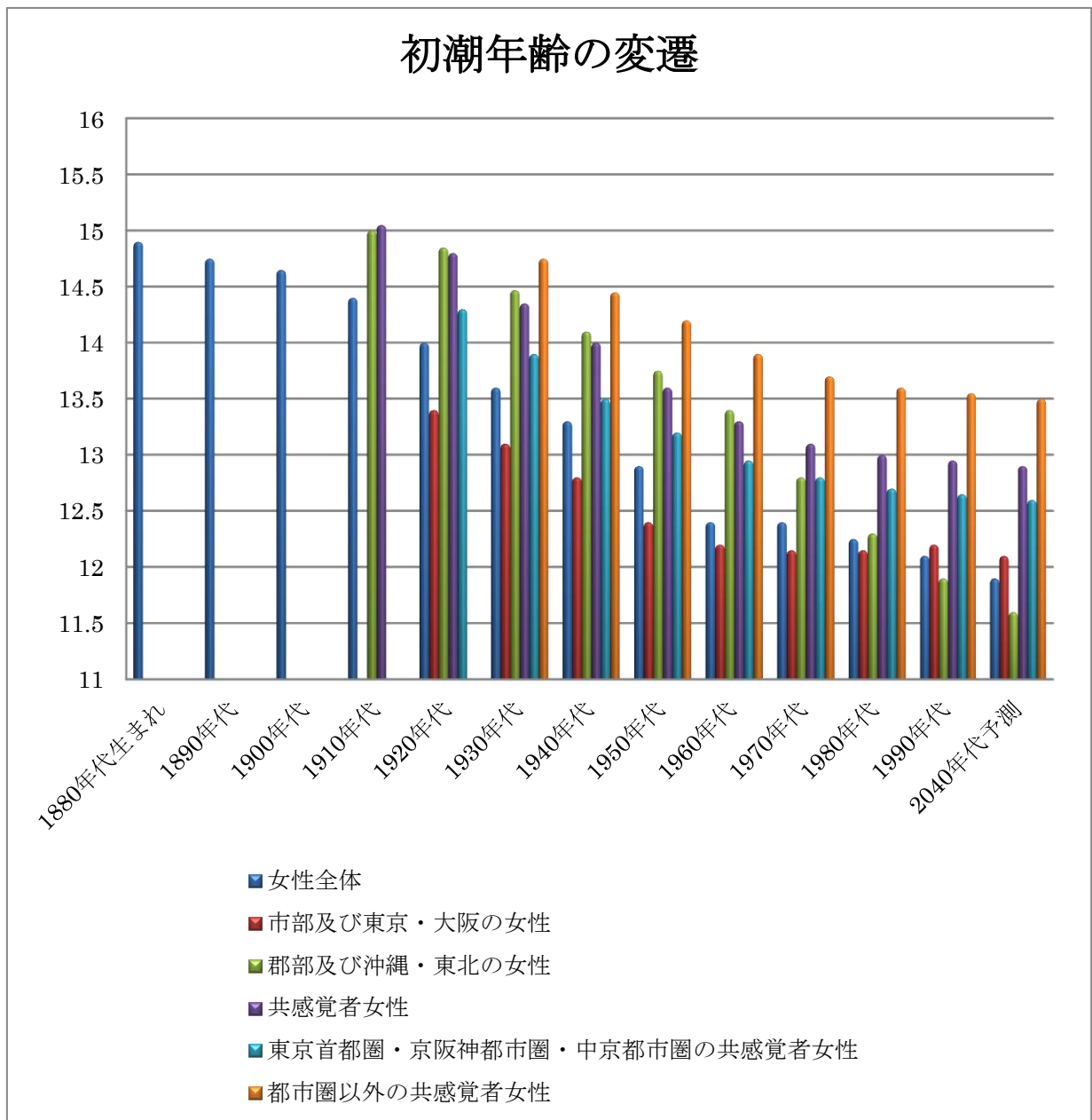


5. 小学生での初潮の経験率



共感覚者女性は、一般女性が初潮の低年齢化を示すのとは対照的に、安定した結果を示している。

6. 初潮年齢の変遷



(グラフを記入していない箇所は、データが見当たらない箇所。)

共感覚者女性では、初潮を迎える年齢は、現在の若い女性でも高い位置で安定している。共感覚者女性の初潮年齢は、現代一般の女性よりも明治・大正・昭和初期の一般女性のそれに近い。³

³ 一般女性の初潮年齢は、例えば、大阪大学人間科学部（日野林俊彦）における、累計 3019937 人の女性に対する全国初潮調査などを参照されたい。

郡部及び沖縄や東北の一般女性では、大都市部の一般女性に比べて低年齢化が遅れたにもかかわらず、1990年生まれ以降の女性では、反対に大都市部の女性の初潮年齢を下回っている。これは、先述の通り、地方の極端な過疎化に伴う妊娠確率向上のための反動であると考えられる。沖縄と青森・秋田など東北の多くで12歳を下回っており、地方でも一定の都市機能と人口とを保つことに成功した滋賀・佐賀などでは、反対に全国で最も初潮年齢が高く、12.4歳ほどである。⁴

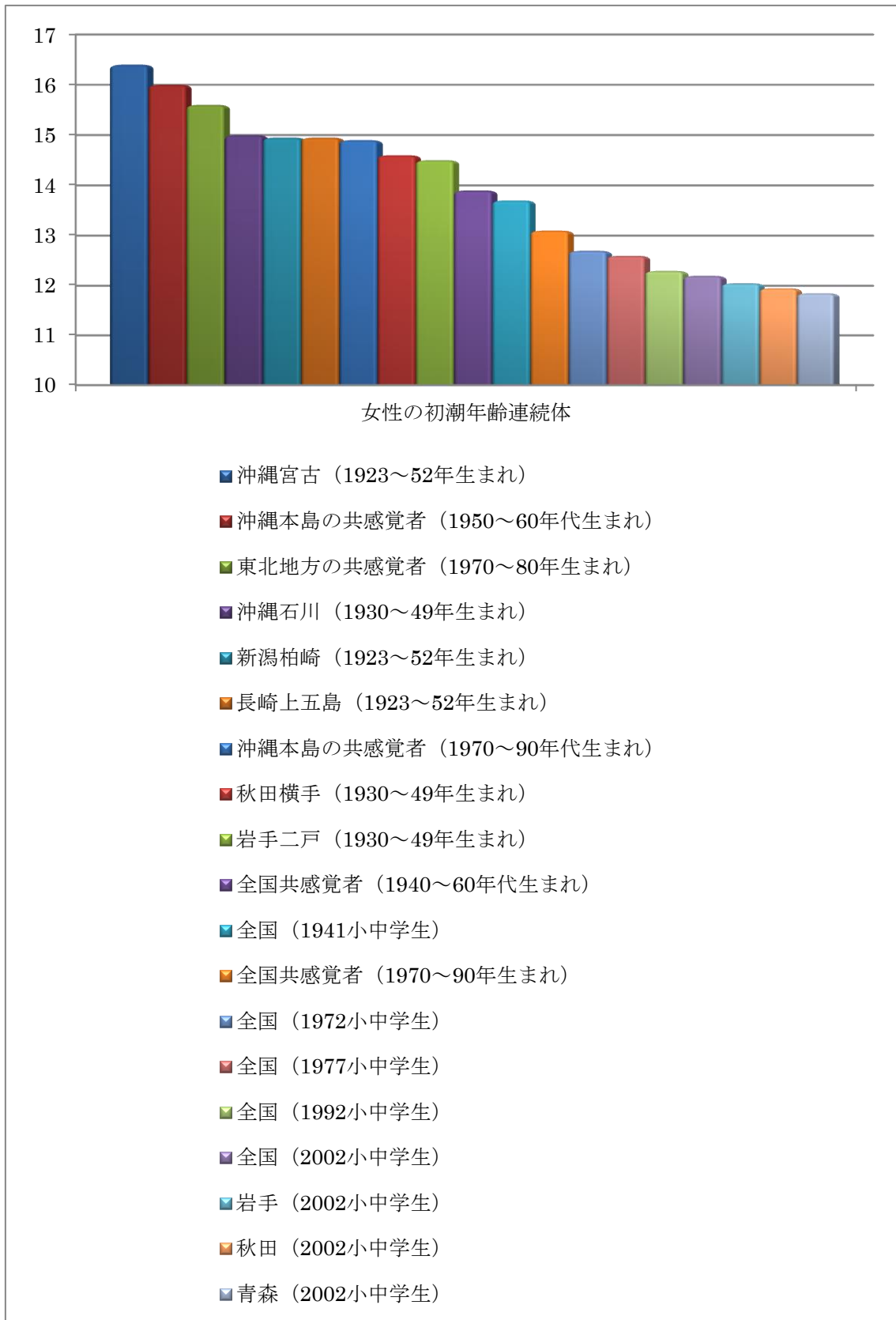
これらの傾向を全て考慮して、2040年代生まれの女性がいかなる結果に至るかを予測計算すると、まず共感覚者女性は、少しずつ低年齢化する可能性があるものの、過疎地域であっても極端な反動による低年齢化は見送ると考えられる。

一般女性では、都市部での低年齢化は鈍化した状態にあるが、沖縄や東北の女性の初潮がこのまま低年齢化を続けると、女性全体の初潮年齢の平均は下がり続ける。

⁴ 少子高齢化・人口減少により、全国47都道府県のうち、2035年時点の人口が2007年の90%以上を保てるのは、東京都・神奈川県・千葉県・愛知県・滋賀県・沖縄県の6都県のみであると予想されている（国立社会保障・人口問題研究所『都道府県の将来推計人口』）。沖縄を除く5都県は、2008年現在、女性の初潮年齢が全国最高レベルにとどまり続ける都県であり、女性の初潮年齢が、人口調査でまだ問題にならない程度の若干の人口の増減にも敏感に反応することを物語っている。反対に、人口を保てず過疎化がより進むと予測される地方の県（青森・秋田・徳島など）では、初潮年齢が、高度成長期には全国最高レベルだったものが、すでに2000年までに全国最低レベルになっている。女性の初潮年齢を調べれば、その地域の近い将来（数十年先）の人口が推測できるとさえ言える。

また、2008年現在、沖縄と東北では、70歳前後の女性の初潮年齢は全国最高レベル、20歳前後のそれは全国最低レベルであり、反対に東京・大阪では、70歳前後の女性は全国最低レベル、20歳前後の女性は全国最高レベルである。今後も、過疎地域の若い女性の体に急激な変化が起これ、負担がかかり続けることが予想される。

7. 地方の過疎化が共感覚者女性・一般女性の初潮にもたらす影響



今までに見てきた女性の初潮年齢について、共感覚者女性・一般女性を混ぜて様々な統計を集め、連続体をグラフに描いた。⁵

かつては、首都圏・都市部に比べて地方、特に沖縄や東北では、初潮年齢が高いことが分かる。1923～52年生まれの沖縄の宮古の女性では16歳を超えていた。女性全体が共感覚的体質であった時代があったこと（都市と地方での近代化格差だけが初潮年齢格差の主要因であった時代があったこと）がうかがえる。現在は、15・16歳を超えても初潮が来ない場合は、婦人科を受診すべきとされるから、隔世の感がある。

一方、最近の10代・20代女性では、共感覚者女性と一般女性とで傾向が二つに割れており、かつて初潮年齢が全国最高レベルであった地方の一般女性が、大都市部を飛び越して最低レベルに位置するようになった。

食生活の欧米化や都市的生活が全国に浸透したことで、大都市部と地方との初潮年齢格差が縮まった一方で、生物学的に見て、一時的な環境への対応には弱いのが、卵巣のはたらきが長期的に安定している共感覚者女性と、一時的な環境変化には強い対応を見せるが、初潮が早いと罹患率が上がる疾患（子宮頸癌・乳癌など）にかかりやすい一般女性との差のほうが目立つようになったと言える。

参考文献（論文中に直接引用・使用した文献のみ掲げる。）

「国勢調査」（1920-2005）総務省

「第12回全国初潮調査」（2008）大阪大学大学院人間科学研究科・比較発達心理学研究室

「HIV感染症の疫学研究 ―日本人のHIV/STD関連知識、性行動、性意識についての全国調査―」（2000）厚生労働省

「第6回・青少年の性行動全国調査報告」（2005）財団法人日本性教育協会

「全国の実態調査に基づいた人口妊娠中絶の減少に向けた包括的研究 ―男女の生活と意識に関する調査―」（2006）厚生労働省、Repro Health Information Center

「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究」厚生労働省がん研究助成金による指定研究班

「東京都の高校生3000人に対する性交経験率の調査」（2002）新潟医師会

「高校生1万人に対する性交経験率の調査」（2005）高校生全国高等学校PTA連合会

「性交経験者の初体験時期」（1999）東京都高等学校性教育研究会

「第25回全国家族計画世論調査」（2000）毎日新聞社

「性意識・性行動調査」東京都幼小中高心性教育研究会

⁵厚生労働省がん研究助成金による指定研究班「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究」（主任研究者 津金昌一郎 国立がんセンターがん予防・検診研究センター予防研究部長）の統計結果も組み込んだ。

- 「青少年の就労に関する研究調査」(2005) 内閣府政策統括官
- 「精通年齢(初めての射精年齢)の遅延傾向」額田 成、江口純治 神戸市立西市民病院
小児科
- 「日本語の獲得過程で現れる主語標識の分裂」(2006) 鈴木猛
- 「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」(2006) 日本精神神経学会
- 「新しいジェンダー・アイデンティティ理論の構築に向けて ―生物・医学とジェンダー学の問題―」(2006) 中村美亜
- 「性犯罪者処遇プログラムの実施について」(2005) 法務省矯正局・保護局
- 「配偶者からの被害経験」(2006) 内閣府
- 「犯罪白書」法務省
- 「第11回出生動向基本調査」(1997) 国立社会保障・人口問題研究所
- 「明治以前日本の地域人口」鬼頭宏
- 『都道府県の将来推計人口』(2007) 国立社会保障・人口問題研究所
- 『人口で見る日本史』(2007) 鬼頭宏、PHP
- 『男はなぜ暴力をふるうのか ―進化から見たレイプ・殺人・戦争―』(2002) マイケル・P・ギグリエリ著、松浦俊輔訳、朝日新聞社
- 『脳に組み込まれたセックス ―なぜ男と女なのか―』(2000) デボラ・ブラム著、越智典子訳、白揚社
- 『セクシャルハラスメントとどう向き合うか』(2001) 落合恵子、吉武輝子、岩波書店
- 『暴力被害と女性 ―理解・脱出・回復』(2001) 村本邦子、昭和堂
- 『言語学大辞典』(1988-2001) 亀井 孝、河野 六郎、千野 栄一、三省堂
- 『人間に於ける女性の性行為』(1953) Alfred Kinsey
- 『ぼくには数字が風景に見える』(2007) ダニエル・タメット 古屋美登里=訳 講談社
- 『ねこは青、子ねこは黄緑―共感覚者が自ら語る不思議な世界』(2002) パトリシア・リン・ダフィー 石田理恵=訳 早川書房
- 『共感覚―もっとも奇妙な知覚世界』(2006) ジョン・ハリソン 松尾香弥子=訳 新曜社
- 『共感覚者の驚くべき日常―形を味わう人、色を聴く人』(2002) リチャード・E・シトーウィック 山下篤子=訳 草思社
- 『脳のなかの幽霊、ふたたび―見えてきた心のしくみ』(2005) V・S・ラマチャンドラ
ン 山下篤子=訳 角川書店